

京都大学	博士（文学）	氏名	岡田 勇督
論文題目	ガダマー解釈学と宗教思想 — 解釈における〈一と多〉の構造を手がかりに —		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>20世紀の後半から現代に至るまでの西洋現代思想において、「解釈学」は現象学などと並んで一つの有力な立場を形成してきた。その中で、神学や宗教哲学を含めた広い意味での「宗教思想」も理論的支柱を解釈学に求め、リクール、ヴァッティモ、解釈学的神学の思想家などが生産的な議論を行っている。このような点で、「解釈学と宗教思想」という対はすでに広く共有された課題設定であるといえる。しかしながら、「解釈学」の語が人口に膾炙するきっかけとなったガダマーの解釈学と宗教思想の関係は、未だ十分な形で問われることがなかった。このような事情を背景に、本論は「ガダマー解釈学と宗教思想」をその研究主題として掲げる。</p> <p>先行研究に従って、この「ガダマー解釈学と宗教思想」という主題に沿った研究の歴史を辿ってみると、そこには「ガダマー解釈学に対する体系的・統一的な観点の欠落」という問題が浮上する。すなわち、ガダマー解釈学という一つの哲学的理論を十全な形で理解することなく、宗教的なテーマに対する応用という関心が先行してしまっているのである。したがって、本論は「(1)ガダマー解釈学を体系的・統一的に把握すること」という要請に妥協せず、「(2)そのうえでガダマー解釈学を宗教思想に関連させること」を目指すことを課題とする。</p> <p>この課題を達成するため、本研究では「解釈における『一と多』という構造」を取り上げ、これを「解釈学」と「宗教思想」の媒介項として用いる。一方で、「解釈学」にとって「一と多」はその本質的な構造をなしているといえる。まず、「一」なるテキストから「多」様な解釈が引き出されることは、人文学における自明の事実であるといえる。さらに、恣意的・相対主義的な解釈に対して主張される「一」つの規範的なテキストの意味と、すべての多様性を併呑する絶対的な一なる規範に対して主張される「多」数のテキストの意味の可能性という弁証法も、人文学の本質的な構造を描き出している。他方で、「宗教思想」にとっても同様の意味で「一と多」という構造が見出せる。「一」つのテキストである聖典から、時代ごとに「多」様な解釈が引き出されてくるということや、歴史的・批判的な方法によって再構成が試みられる「一」つの規範的な解釈、あるいはその背後にある唯「一」の歴史的事実と、それでも多様な立場・多様な観点から聖典を読むことによってそれを現代への使信となし、新たな伝統を形成してゆくという弁証法も、宗教思想の在り方として重要なものを含んでいる。</p> <p>このような観点に基づいて、まず第一部（第一章から第四章）では、ガダマー解釈</p>			

学を宗教思想へと接続するための準備作業として、従来のガダマー研究における近年の基本的な諸問題を検討することによって、解釈における「一と多」という構造が彼の体系を浮き彫りにするのに適切な枠組みであることを示す。その際、「一と多」という構造はガダマー研究史における二つの立場である「実在論と反実在論」に相当することが示され、ガダマー自身がその二つの間で実際にどのような立場をとっているのかについての回答が与えられることになる。

第一章では、『真理と方法』のタイトルにおける二つの概念である「真理」と「方法」の関係に着目する。「真理」と「方法」は、しばしば対立（真理対方法）か二者択一（真理か方法か）の関係にあると考えられてきた。ところが、ガダマー自身はこの解釈を容認したことは一度もなく、逆に「方法」の契機が解釈学や人文学一般にとって不可欠で本質的であることを述べている。ここでは、「理解の歴史性」における二つの相反する強調点（「解釈の拡散」と「解釈の収束」）を区別することによって、彼の解釈学を批判から救出することを試みる。

第二章では、ガダマー解釈学を理解するために重要な句「理解されうる存在は言語である」を取り上げる。ヴァッティモの論文「あるコンマのはなし」では、この句の関係節について二つの解釈が提出された。一方で、反実在論の解釈では、存在と言語がある意味で同一視され、存在は言語活動によって変化させられうると理解される。他方で、実在論の立場では、存在の中の一部が言語として理解可能なのであって、存在は人間の言語から独立していると理解される。このような論争史から、「ガダマーは実在論者なのか反実在論者なのか」また「『理解されうる存在は言語である』という命題はどのように解釈されるべきなのか」という二つの問いが提起される。

第三章では、「ガダマーは実在論者なのか反実在論者なのか」という問いに解答を与えることが試みられる。実在論的解釈を支持するものとしてはワクターハウザーの「視点論的実在論」が挙げられる。彼の理論はガダマーにおける重要な議論を踏まえた非常にバランスが取れたものであるが、一点のみ問題がある。それは、ガダマーの解釈学を完全に「実在論」の側に取り込んでしまっている点である。ガダマーの立場は限りなく実在論に近いものではあるが、しかしながら実在論そのものでもない（あるいは実在論という問題設定そのものを回避している）という、より複雑な立場の規定が要求されている。

第四章では、「『理解されうる存在は言語である』という命題はどのように解釈されるべきなのか」が問われる。この問いは、「ガダマーにおける存在論的差異はどうなっているのか」という別の問いによってより適切に理解可能になる。というのも、この命題における「存在」はしばしば実在や存在者の総体という意味において理解されてしまっているが、これはハイデガーとガダマーの思想的連続性を考慮に入れていないからである。ここでは『真理と方法』の言語論を存在論的差異の観点から首尾一

貫して読解することによって、この命題に適切な解釈が与えられることを示す。

第二部（第五章から第七章）からは、「ガダマーと宗教思想」という問題系に足を踏み入れることになる。具体的には、ガダマーと神学者たちの議論や影響関係を見ていくことによって、解釈における「一と多」という構造がその中においても見られ、解釈学と宗教思想との対論を分析する際にも有用な観点であることが示される。

第五章では、ガダマーと神学者パネンベルクによる対論が扱われる。その争点は言語論と歴史論の二つに分けることができる。第一に、言語論では、言葉の背後にある「無限に多くの言われなかったこと」を強調するガダマーに対して、パネンベルクは言語が一義的・客観的に意味を他者へ伝達できることを強調する。第二に、歴史論では、パネンベルクはナザレのイエスの復活において終末が先取りされているという議論をもって普遍史の構想を語り、地平の融合を論ずる解釈学はそこへと最終的に合流すると主張するが、哲学者ガダマーは最終的にその議論に同意することはできなかった。この二人の議論は、解釈における「一と多」という構造についての典型的な意義を有しているといえる。

第六章では、ガダマーとブルトマンにおける解釈学的構造の比較が行われる。ブルトマンがテキストの解釈における観点を実存へと一極的に集中させる傾向があるのに対して、ガダマーはそのような観点を絞らず、解釈の可能性を「多様性」へと開いたままにしているという傾向の違いがそこでは見て取られる。

第七章では、ガダマーによるブルトマン批判を分析する。ガダマーによれば、彼が『真理と方法』の第一部・芸術論において展開した「遊び」の概念が、ブルトマンの聖書解釈において問題となっていた「信仰の自己理解」の別の側面を照らし出すことになる。信仰の自己理解は、信じる主体が自己制御の努力の末に自ら獲得できるものではなく、ただ出来事として神から与えられるものである。それ故に、その自己理解の在り方は、主体が自分自身について主導権を握っている「自己所有」ではなく、状況の中において翻弄される「自己喪失」の性格を持つのである。

第一部では従来のガダマー研究における諸問題において、第二部では神学者たちとの対論において浮かび上がった、解釈における「一と多」という構造は、第三部（第八章から第十章）においては『真理と方法』の読解という形で改めて統一的に示されることになる。その際、『真理と方法』に直接的にはあまり登場しない「一と多」の構造を「有限性」の概念を用いて具体化することによって、間接的に「一と多」の構造が明瞭になり、さらに具体的な宗教的テーマとの結び付きも示されるであろう。

第八章では、『真理と方法』第二部の歴史論における有限性の概念が探求される。ロマン主義的解釈学の流れには、現在の解釈者が自らのもつ歴史性を忘却して過去を理解しようとする「知の無限性」の傾向が垣間見える。ガダマーはそれに対して、歴史における人間の有限性を考慮に入れた解釈学を展開する。「先入見」「伝統」「影

響作用史的意識」の諸議論においては、現代の解釈者が過去からの影響に晒されていることが示される。

第九章では、『真理と方法』第三部の言語論における有限性の概念が探求される。ガダマーの批判対象である「道具主義的記号理論」は、事柄と言語を分離することによって、言語を二次的に事柄に貼り付けられる単なるラベルとしての地位に貶めてしまった。これに対して、ガダマーは言語哲学の歴史を辿り、人間の認識が言語と一体化しており、言語によってある意味で制限されたものであると見なす、言語における有限性の思想を展開する。

第十章では、『真理と方法』第一部の芸術論における有限性の概念が探求される。批判対象である「美的意識」とその働きである「美的判別」に対して、ガダマーは芸術作品の存在様態を「表現」と規定し、オリジナルに対してしばしば二次的と捉えられがちな上演、演奏、解釈なども本質的なものとして取扱う。その結果、説教や宗教画、そして聖餐など宗教的主題においても芸術作品と同じ存在様態や時間性が確認できるようになる。

終章では、これまでの成果を前提としつつ、解釈学と宗教思想の関わり方に対するさらに具体的な提案が行われる。それはすなわち、解釈学と宗教思想を媒介する「一と多」という構造を「翻訳」という観点から捉え直すという試みである。一方では、「一と多」の構造をもつ「解釈」という現象は、「理解」という現象と内的一体性を持っているという事態を改めて確認しつつ、その内的一体性はさらに「翻訳」にまで拡張されうる。他方で、宗教思想の文脈における「弱い合理性」によるコミュニケーション可能性という現代的課題を確認し、それに対してハーバーマスの「世俗と宗教の協同翻訳理論」がよいモデルとなりうることを指摘し、宗教思想にとって「翻訳」が本質的な営みであることを示す。このようにして、解釈学と宗教思想は理解や解釈と同じく「一と多」の構造を持った「翻訳」によって媒介されることが明らかになり、解釈学的現象としての「翻訳」を基盤にした「解釈学的宗教思想」の可能性が提唱されることになる。

(論文審査の結果の要旨)

ハンス=ゲオルク・ガダマー (1900-2002) は、20世紀半ば以降の解釈学において主導的な役割を果たしてきた哲学者であり、その決定的な影響は、活動拠点であったドイツや、その近隣のフランスやイタリアだけでなく、広くアメリカや日本などにも与え続けてきた。その主著『真理と方法』に見られるように、ガダマーは指導教員の一人であったハイデガーの解釈学から強い影響を受けつつ、特定の歴史的視点の立脚という独自の理論を展開したが、彼の思想をこのように哲学的潮流の上で捉える研究とは別の潮流が、20世紀の後半から今世紀の前半にかけて現れた。それは、ガダマーの思想を宗教哲学や神学の潮流の上で捉え直そうとする試みであり、岡田論文も、このような研究史上で独自の分析観点を模索しようとするものである。このような試みが生じる背景としては、広く古代から現代に至るまでの哲学を射程範囲とするガダマーの思想を体系的に分析するためには、宗教哲学や神学を包括する宗教思想的観点からの考察が不可欠である点が挙げられる。その上で、本論文はまず、主に1990年代からのガダマーと宗教思想の関係に焦点を当てた先行研究を三つの傾向に区分し、それぞれがもつ限界点を指摘した上で、それらを通底する視点として「解釈における『一と多』という構造」という分析観点を用いている。ここでの「一と多」とは、ある種の普遍妥当的な解釈への志向性と、個々人がそれぞれの文脈において多様に解釈する志向性との間の緊張を部分的には表現している。結論を先取りすれば、本論文では、ガダマーが対立する双方への傾向を示しつつも、どちらにも偏向することなく独自の道を模索したと捉えられており、その視点をもとに、ガダマーの宗教思想を含めた統一的思想体系を描き出そうとしたことに独自の意義があると言える。以下では、その具体的内容について、本論文の構成に即して特筆すべき点について説明を行いたい。

本論文は、分析の中心となる宗教思想との関連を第二部 (第五章から第七章) と第三部 (第八章から第十章) において行っているが、その準備作業として、第一部 (第一章から第四章) において、ガダマーの解釈学の基本的枠組みを「一と多」の観点から考察することの妥当性について分析している。ガダマーに関する先行研究は、一なる真理を探究する実在論と、ある種の相対主義に向かう反実在論とのいずれかにガダマー思想を位置付けようとする傾向があるが、本論文はそれぞれの問題点を浮き彫りにした上で、ガダマー思想を、実在論を志向しつつもそこには踏み込まない姿勢を維持していたものと理解する。ガダマーは確かに解釈の多様化を重視しているが、相対主義に陥ることを避けており、そのためにより適切な解釈、すなわち真の先入見と誤った先入見の区別を説くが、すべてを裁断するような規準をもつことも忌避していると本論文は指摘する。ここでは、実在論と反実在論という対比が「一と多という解釈の構造」という視点から分析することが妥当性を持ちうることが示されている。実在論は現代思想の重要問題の一つであり、本論文によって、このテーマとの関連におけるガダマー哲学の思想的意義が明確にされたことは、大いに評価できるであろう。

その上で、第二部はガダマー解釈学における宗教思想との関連を主としてパネンベルクやブルトマンとの対話ないしは関係から分析し、ガダマーの思想が彼ら著名な神学者と比較してどのような位置付けにあるかを考察している。パネンベルクにおける陳述と伝達、また普遍史と個別の歴史という対比は、それぞれ「一と多の構造」に対応するが、命題化する陳述やある種の神の視点をも包摂する普遍史を重視するパネンベルクに対し、ガダマーはあくまで解釈の多様性を重視すると本論文は指摘する。この図式は、比較的ガダマーに近い立場と考えられていたブルトマンについても当て嵌まり、「一」の方向に向かう実存論的・人間論的解釈を重視するブルトマンと、多なる解釈を重視するガダマーの思想的対比が詳細に分析される。パネンベルクやブルトマンの思想的特徴とガダマー思想との差異に関する行き届いた考察は、本論文が現代キリスト教思想研究に対して行った重要な寄与といえる。

続く第三部では、第二部での比較考察を踏まえて、彼の主著『真理と方法』における有限性の概念を主軸として、ガダマーの解釈学と宗教思想との関係の解明を試みている。上述のパネンベルクとガダマーの対比にも重なるが、歴史全体を知る精神の遍在は、啓蒙主義が要求するような知の無限性に立脚するものであり、そのような歴史の「外側」の視点は、神のみが持ちうるものであり、有限性を担う人間が僭称すべきではないとガダマーは理解する。ここでは、無限性と有限性の対比が「一と多の解釈の構造」という観点から描き出されているが、人間の先入見、歴史性などガダマーが有限性を積極的に捉えようとした立場がその宗教思想との関連から詳細に至るまで検討されている。本論文のこのような考察を通じて、ガダマー解釈学を西洋思想史全体（古代から中世、また近代から現代に至る）に明確に位置付けられることになった。

このように、本論文は、近年のキリスト教思想研究の分野でも重視されつつある解釈学に正面から取り組み、膨大な先行研究を独自の観点でまとめつつ、原典を丁寧に分析しており、評価すべき点を多くもっている。他方で、解釈の「一と多」の双方に目を配ったとされるガダマーが、果たしてどれだけ「一」を重視したのか、またそれを軸に分析した先に、ガダマーの思想体系としてさらに何が見えてくるのかなど、今後の課題と見なすべき点も指摘されうる。しかし、こうした問題点は本論文の意義を著しく損なうものではなく、今後の研鑽において克服することが十分に期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2021年10月25日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。